

みなさまと協会をつなぐ

# ハーネスひろば特集

## 「それぞれの思いをのせて 一緒につくる会報誌」

創刊30年、会報誌「盲導犬くらぶ」が100号になるのを記念してみなさまからたくさんのお便りをいただきました。感謝をお伝えするとともに、会報誌を通じた「やりとり」にあらためて心強いつながりを感じております。本号ではお便りの一部ですが紹介します。



### 「盲導犬くらぶを パピーから育てて」

初期の頃に「盲導犬くらぶ」の記事を書いていた者として、私が名付けたお便りコーナー「ハーネスひろば」に掲載していただけたとのこと、大変うれしく思っております。

私が協会の職員になったのは、会報誌がきっかけです。賛助会員だった私は、会報誌でオーストラリアの Royal Guide Dog Association (「王立盲導犬協会」、現Guide Dogs Victoria「ビクトリア盲導犬協会」)に関する記事を読み、海外の盲導犬育成団体を見たいと協会に連絡先を聞き、旅行がてら訪ねたのでした。これがさらなるご縁につながり、協会の職員となったのでした。

会報誌を担当してからは、現場の思いをちゃんと届けることを一番に考えていました。特に印象に残っているもののひとつが、池谷さんという女性の共同訓練密着レポート記事です。取材で一緒にさせていただく中で池谷さんの優しさや芯の強さに心引かれ、このお人柄が伝わるように書きたいと強く思いました。また、盲導犬ユーザーでもあるアメリカの写真家アリス・ウィングウォール氏の盲導犬写真展を開いたときのこと。なぜ自分の盲導犬の写真を撮るのかという質問に対して、アリスさんは「彼の形がとても美しいから」と答えました。アリスさんは盲導犬ユーザーではあるけれど、

創刊直後から10年間 会報誌編集をした先輩から特別寄稿 茶谷 千穂さん 51歳 (静岡県長泉町)

彫刻家であり写真家なのだということを強く感じました。記事にするときは、芸術家としてのアリスさんの魅力を伝えられるように心がけました。

今や日本盲導犬協会は、私がオーストラリアで見た「先進の盲導犬育成団体」のような組織に成長し、感慨深いです。これからも賛助会員として陰ながら応援させていただきます。



第3号で誕生した「ハーネスひろば」は読者のみなさまとの「ホットライン」として今も受け継がれています

### 編集室より

協会の会報誌が創刊されたのは1990年4月のことでした。当時全国に盲導犬は600頭余り、協会は神奈川県茅ヶ崎市に小さな訓練施設を構え、訓練士が3人、そんな時代でした。創刊号会報誌に名称はなく、「盲導犬くらぶ」という名前が登場するのは1993年3月発行の第3号になってからです。当時は年1、2回不定期に発行

して、事業報告やイベント紹介の他、ご支援者全員の名前も掲載していました。読者からのお便りを紹介する「ハーネスひろば」というコーナーが始まったのも3号からでした。その名付け親であり、10年近くにわたり会報誌制作を一手に担っていた茶谷さん。今回100号を記念して、実に20年ぶりに会報誌のために筆をふるってくださいました。

## 「キャリアチェンジ犬アイボとの 10年 娘は二十歳に」

小沢 由美さん 50歳 (山梨県韮崎市)

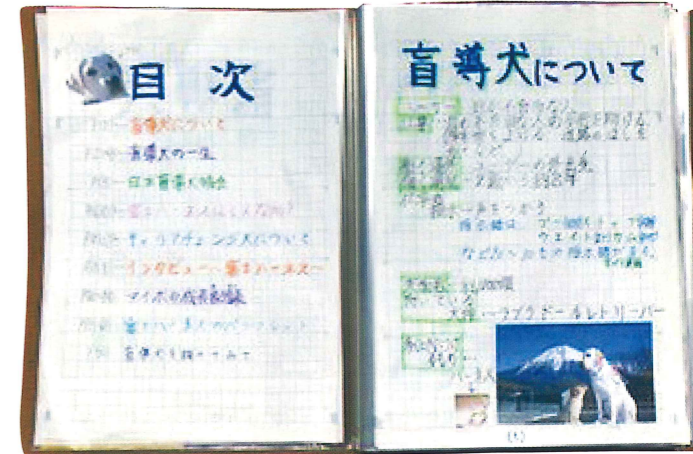
協会との縁は、当時我が家の10歳の娘が夏休みの自由研究で「盲導犬研究」をテーマにしたことがきっかけです。その娘も今年、成人式を迎えました。我が家のアイボは、2歳の時に富士ハーネスからやってきました。対面当初ははちきれんばかりに尻尾をふり、元気があり余っている感じでした。そんなアイボも現在11歳。相変わらずおちゃめな所もありますが、落ち着いた大人の女性になりました。

今ではひげが白くなりましたが、食欲旺盛でお散歩も大好き。アイボは、とても優しい女の子で、みんなに愛されています。アイボが来てくれたおかげで近所の方との交流も生まれ、我が家の日常がさらに豊かになりました。

キャリアチェンジ犬ボランティアにご縁があり、とてもありがたく思っています。小さいころから犬が好きだった娘は、小学校3年生から盲導犬研究を続け、40ページにも及ぶ記録ファイルや読書感想文が残っています。今も我が家の宝で、大切に保管しています。

### 編集室より

娘の芽生さんは現在大学生で、家族と離れて暮らしています。「帰省でアイボと会えることがいつも楽しみ」。将来の夢は学校の先生。



思い出がいっぱい詰まった「盲導犬研究」のファイル。富士ハーネス職員へのインタビュー記事など本格的。アイボがきてからはその成長記録が続いています

アイボを通して近所の子供たちと交流するうちに、ももとの犬好きに加え子供好きにもなったそうです。

## 「草野球で安打分を寄付」

武井 仁志さん 43歳 (埼玉県幸手市)

地元の準社会人軟式野球でプレーしており、1安打につき1,000円を積み立てて寄付させていただいております。本年は残念ながら新型コロナの影響で公式戦が実施されておりませんが、練習試合を2試合行うことができ、おかげさまで8打席立ち14球、7打数4安打の結果(7/18時点)でございます。

地元の準社会人軟式野球チーム所属24年目43歳となりましたが、大好きな野球を通じ安打を打つことでお

### 編集室より

憧れである元読売ジャイアンツの清水隆行選手の活動をきっかけに、この寄付方法を実践しています。年も近く、同じ活動をしてみたいと思ったそうです。今後も可能な限り続けていき

役に立てればという気持ちが、まだまだ現役でプレーできる原動力となっております。

私もワンちゃんが大好きで、現在8歳になる柴犬とジャーマンシェパードのミックス犬の家族がいます。ワンちゃんは、我々人間がちゃんと話しかけてあげて愛情を注げばお互いに意思疎通ができる永遠の「人間最良の友達」ですね。

いとこの熱血ぶりが伝わってきました。飼犬も元はブリーダーの放棄から引き取ったそうで、犬への深い愛情も感じられます。

# ハーネスひろば特集



## 「ユーザーへの声かけ 『会報誌が役に立った』」

盲導犬との出会いは20年ぐらい前のかすみがうらマラソン大会です。そこでアイマスクをつけて盲導犬歩行を体験させていただき、それ以降会員になっています。他の機関誌などはあまり目を通す余裕がないのですが、「盲導犬くらぶ」だけは端から端まで全部読んでいま

### 編集室より

子供の運動会で思うように走れず、以来マラソンを始めました。かすみがうらマラソンは国際ブラインドマラソンも併行して行われてお



**Oさん**  
(茨城県茨城町)

す。5年ほど前、都内の道路工事現場で立ち往生するユーザーに声かけをしました。そこで会報誌で得た声かけの知識が役に立ち、途中まででしたがスムーズにユーザーを案内することができました。

り、盲導犬の理解促進活動も実施していました。最近はなかなか走れていませんが盲導犬の応援は続けてくださっています。

## 「不登校の子供たちが パピーと外の世界へ」

我が家はパピーウォーカーをしていて、夫と小学生の娘と息子、3頭目のパピーがいます。ボランティアのきっかけは3年前、子供たちの不登校でした。家に籠もる子供たちに「何か社会とのつながりを作ってあげなくては」と必死でした。習い事に誘っても行かない子供たち。そんなとき、ショッピングモールで盲導犬の普及活動をしていたかわいらしい犬たちに会い興味津々に。

元々動物が好きなお子たちは犬を飼いたがりましたが「動物を最後まで面倒みるのは大変で、簡単には飼えません」と断っていました。しかし夫が「パピーウォーカーなら1年の期限付きで、世話する大変さも体験して、社会との接点もできて良いんじゃない？」と提案。私も少し悩みましたが「子供が社会とつながるきっかけが出

### 編集室より

訓練センターのシャンプー室と一緒にになったユーザーから、感謝の言葉をもらったことが子供たちの大きな自信につながったといいま

来れば」と始めました。月1回のレクチャーでは最初、私や夫が訓練士さんや他のパピーウォーカーの家族と話す姿を子供たちは黙って見ていました。繊細な子供たちは自分から話すことは少ないですが、活動のなかで少しずつ「自分は社会貢献をしている1人」と自信を持ち「わんちゃんは私の御守りみたいな存在」と言うようになりました。初めは意味が分かりませんでした。最近娘が「学校で大きな声で発表できるようになったのはパピーウォーキングのおかげ」と一言。「なるほど、御守りがあったから勇気が出たんだね」。今では毎日学校へ行き友達と遊び、充実した様子です。

す。何げない一言がとてうれしかったようです。お母さんは、子供たちとパピー「三人姉弟」の成長を楽しみに見守ります。



**Hさん 37歳**  
(宮城県)



**こじま みちこさん 41歳**  
(愛知県一宮市)

そうご君7歳とさおりちゃん4歳が描いた盲導犬の絵 赤ちゃんの頃から犬が好きだった子供たちが盲導犬にも興味を持ってくれるきっかけになればと、会報誌をいつも一緒に見えています。「かわいい」と喜んでいます。最近では盲導犬の児童書を読み聞かせています。

## 「ロービジョンへの誤解に 吠えさせていただきます」

我が家の次女は白杖を持って歩きます。以前、白杖を突いて歩いている方は全盲、白杖を持って歩いている方は弱視と聞いた事があります。次女は弱視です。

先日、次女が車で下車しようとした時に、ホーム側でドアの真ん中辺りに人がいるのが分かり、避けて下車した所「白杖持っているくせに、見えているんじゃないか」と怒鳴られたそうです。ではぶつかればよかったのか？ たった1人のこの暴言に、とても悲しくなった母でした。

確かに少しは見えます。でも、我々の様な視野ではなく、見えづらいという事が事実です。白杖を持っている方は全盲だけではなく、弱視の方もいます。という事は盲導犬を連れてくる人の中にも弱視の方がいるという事。それを、皆さんに知っていただければいいなと思いました。

### 編集室より

「次女の成長を通じて多くを学ばせてもらった」といいます。協会やキャリアチェンジ犬のセブンとも出会い、人との縁が増えました。山



**信國 清美さん 58歳**  
(東京都中野区)

世間の(ロービジョンへの)誤解に吠えさせていただきます。(アレどこかで聞いたなあ(笑))



↑自宅で美容室を営んでおり、募金箱の設置もしています。看板犬のセブンとともにお客さんをお出迎え

登りが好きで、同じ趣味を持つボランティアやユーザーとも交流を持っています。みんなの近況を知るためにも、会報誌にはくまなく目を通してらるそう。

**前垣 好司さん 65歳**  
(岡山市)

自然食品を売っていますが、賞味期限が過ぎたのを捨てるのはもったいない。期限切れが気にならない方に持ち帰ってもらいます。その時、盲導犬募金箱にお気持ちを入れていただいています。

## 「協会とは35年の付き合い」

協会を知ったのは35年ほど前の事です。団地から一軒家に転居するのを待っていたかのように、友人の所で生まれたアイリッシュ・セッターが我が家にやってきました。大型犬のため、きちんとしたしつけが必要と考えていた矢先、夫の知り合いがいた盲導犬協会で、一か月ほど訓練をしてくださるということでお願いすることになりました。

### 編集室より

35年前というと、協会は東京・小金井訓練所で活動していた頃です。安井さんの夫は10年以上前に亡くなりましたが、動物関係の書籍

の編集、出版をしていたそうです。愛犬を預ける段取りや細かい経緯は分からないとのことですが一緒にに行った訓練所の印象は鮮明にあるそうです。

**安井 厚児さん 70代**  
(東京都渋谷区)

家に戻ってきた時にはすっかりお利口になっていて、家族で大喜び。それからは気持ちが通じ合い、我が家の一員となりました。これがご縁の始まりで支援を続け現在に至っています。100号ということに懐かしく昔を思い出したので、お便りさせていただきました。

# ハーネスひろば特集



## 「祖父への恩返しを盲導犬で」

賛助会員になったのは20年ほど前だったでしょうか。年月ははっきりと記憶にありませんが、理由は明らかです。実は祖父は私が生まれる前の50代で全盲となったそうです。祖父は私が大学生の時に他界しましたが、同じ街に住んでいながら離れた場所だったこともあり、ついに一度も手を引いて歩くことがありませんでした。実家は長崎市にあり、私は東京の私立大学へと進学しました。学費・生活費は我が家の家計にかなりの負担となっていたはずなのですが、それを支えてくれてい

たのが祖父からの経済的援助であったと、後に母から聞かされました。子供だったとはいえ、全く手を引くこともできなかったことへの後悔もあり、祖父への恩返しとの思いから、ささやかながらの支援を続けさせていただいています。今年60歳を迎えて定年退職しましたが、可能な限り行っていきたいと思っています。

### 編集室より

中村さんは40歳のころ、「人生の折り返し点を過ぎたので、何か世の中に恩返しを」と考えたそうです。幼稚園児のころ、祖父に「高い、高い」をしてもらったことが印象に残っています。

中村 寛さん 60歳  
(さいたま市)

## 「会報誌はみんなをつなぐ大切なパイプ」

大型犬が大好きな私たち夫婦は、60歳の定年から健康維持と社会貢献を兼ねて繁殖犬飼育ボランティアになりました。チップー号(オス5歳チョコラブ)の飼育を担当しています。チップーのお陰で65歳の今も元気に至福の犬三昧セカンドライフを楽しんでいます。ボランティア5年目を迎えた今年3月、チップーの子供が念願の盲導犬オハナ号になり前回の99号に写真入りで掲載されました。立派に成長して元気に仕事を

している様子を本誌で知り、ボランティアをやって本当に良かったと喜んでます。普段は直接ユーザーさんの声を聞くことは無く、チップーの子供たちのその後の様子も分かりません。そんな中、「盲導犬くらぶ」は、私たちと、ユーザーさんや協会をつなぐ大切なパイプです。毎号、夫婦でとても楽しみにしております。

### 編集室より

チップーは体格がよく力の強い雄犬で、最初の1年はハンドリングに苦労したとい

います。ペットと違って責任も重大ですが、いまや「日常になくはならない存在」です。

白石 裕雄さん 65歳  
(東京都大田区)



ペンネーム  
ちさんより

◀会報誌の表紙や印象に残る写真を「ちぎり絵」にして送って下さいました。やさしい色合いと和紙独特のあたたかさが盲導犬のイメージにぴったりです



## 「大学時代から始めた『1%募金』子供にも伝えたい」

杉山 良さん 43歳  
(静岡県富士市)

賛助会員になったきっかけをお話しさせていただきます。始まりは大学生の時に観たテレビからです。アメリカのある地域で習慣として行われている寄付の考え方を番組で紹介していました。それは収入の1%を寄付するという単純なものでした。

ほとんどの人は、収入の1%を寄付したところで生活に何の影響もありません。1万円を握り締めていたなら、ジュース1本飲まなければいけないのです。むしろそのジュース1本分の寄付が、それ以上の広がりを見せ大きく響きました。以来コンビニに行き何かを買ったお

釣りを募金箱に入れるようになりました。

社会人となってからは、犬が好きな私は「盲導犬だ!」とひらめき、賛助会員となり現在に至ります。

私に子供が生まれ、今は1歳半になります。幼稚園に上がる頃にはお小遣い制を始めたいと思っています。その時に収入の1%を寄付するという考えを伝えたいと思っています。この考えが他の誰かにも伝わり、その輪が広がっていく事を願っております。併せて、寄付は特別なことではない事も伝えていきたいと思っています。

### 編集室より

盲導犬を描いた映画「クイール」が強く印象に残っているようで、犬を飼っていたこともあって、賛助会員につながりました。「好きなジャ

ンルで無理のない寄付が自然だと考えています。それを超すとおこがましくなりますから。」

## 「心に栄養をもらおう」

会報誌の「スタートライン」の欄が好きです。最新号でも、女性ユーザーと盲導犬との信頼関係、そしてタンDEM歩行する夫婦に盲導犬がそれぞれの歩みに合わせる心遣い……。私もこの夏で71歳。心がゆるくなっ

ているのかもしれませんが、こういう日常に目をうるませるようになってきました。人として、心に“しげき”の文章を読むのは気持ちいいものです。

### 編集室より

お便りには花と小鳥の絵があしらわれ、「散歩の日々の中で」と添えられていました。

何うと、自宅から徒歩20分の所に森のある広い公園があり、よく散歩するそうです。

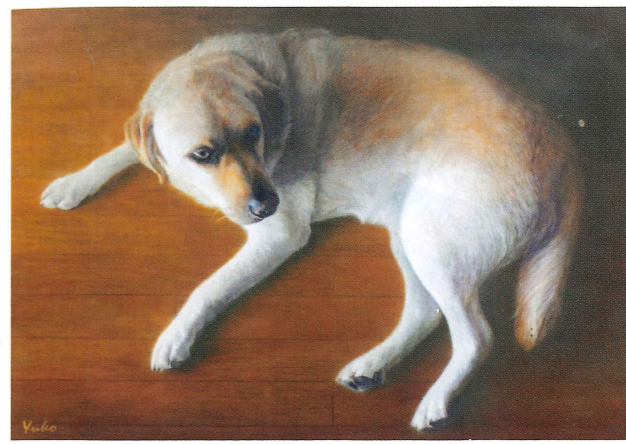
林 澄夫さん 71歳  
(横浜市)



## 「絵画の中で息づく思い出」

2歳の春、ニコラが我が家にきました。11年間、春夏秋冬と四季を過ごし、子供たちも成人して結婚・就職と自宅を離れていきました。ニコラは私たち夫婦と一緒にでした。写真の油絵は友人が描いてくれたもので、美術展に入選、展示もされました。今年6月22日ニコラは13歳で亡くなり、富士ハーネスに納骨しました。青空の下、お友達と元気よく走っているでしょう。

長谷川 紀子さん 65歳  
(神奈川県藤沢市)



みなさまからいただいた「100号記念へのお便り」は、本号で掲載できなかったものも含め全て、協会の「会員専用ホームページ」で紹介させていただきます。準備が整い次第公開していきますので楽しみに!